

25. 《室町時代のイノベーション》

15世紀、武士たちの領地を巡る内乱が頻発しても、国内の人口は着実に増加しています。とりわけ近畿は、人口増加が大きく、関東を逆転して成長していたことが分かります。それは、この時期に、技術革新が密かに進行していたからです。

1420年、来日した中国の明使が、近畿地方で、米→ソバ→麦と、一つの水田で三度種を蒔くと書き残しています。つまり三毛作が実現していたのです。

(注1)

1429年、来日した朝鮮通信使は、近畿の農村で自転揚水車(注2)を目撃し、朝鮮の竜骨車(人が水車の羽を踏んで動かすもの)より便利であることを賞賛しています。

これらの文献から、水車も使って湿田と乾田を切り替える水利技術が発達し、牛馬耕による深耕栽培も普及したことが分かります。これには、鉄製農具が不可欠であり、鉄の生産と鍛冶の普及が背景にあります。また東海地方に輪中が登場してくるのもこの頃です。

さて16世紀には、綿栽培も朝鮮から伝わり、三河・摂津・駿河・相模三浦各地方が産地として登場してきます。国産化した綿は、有力な換金作物ですから、その加工、流通、販売の新しい経済が成立していくことになります。

また照明用として油需要が増え、油の広域流通経済が出現しています。油商人たちが「座」という組合を作り、幕府や朝廷から、材料の荏ゴマの仕入れ・関所の自由通行・各領国で油の独占販売という特権を得て、各領国を超えた広域流通経済を確立しています。(注3)

このように、技術革新とその普及によって、近畿から社会経済システムのイノベーションが起こり、やがて全国に広がっていきました。武蔵国など東国では、日本刀の技術革新は起こりましたが、再び相対的に遅れた地域になったと思われます。(注4)

注1：鎌倉時代までに中国から、旱魃に強く排水不良の土地でも育つ赤米（大唐米）が伝わり、室町時代に西日本で普及しました。この品種の普及やその品種改良された米の栽培が、二毛作や三毛作を支えたと推察されます。

注2：水力自転揚水車の技術は、平安初期に干害対策として政府により中国から導入され、山城宇治を中心に長足の進歩をとげたと考えられています。

注3：有名なものに、大山崎油座があります。幕府や朝廷の特権を得て、近畿とその周辺で、油販売の特権を得ていました。

注4：鎌倉時代末期に、鎌倉に刀鍛冶の正宗が「相州伝」と称される刀製造技術を確立し、それ以降、刀のブランドとなりました。武家社会らしい技術革新とその産業化に成功したということでしょうか。

写真は、①大唐米（弘前大学農学生命学部 HP より）、②日本刀の短刀（国立博物館所蔵 無名正宗 重要美術品 Wikipedia より）、③自転水車（国立博物館一展示 NO2HP より）

①



日本のコメ(左), 細長い赤米
の大唐米(右). バーは1mm

②



③

